

Layback

レイバック

てのひらのしょうせつ

— 短編集 —



パブー文庫

合図

ギャル系だし男慣れしてるかなと思ったのだが、いざ寝てみるとマグロだった。曰く。声を出すのが恥ずかしい。らしい。それでも男としては意思表示ぐらいしてほしい。気持ちいいときには右手。痛いときには左手を上げる。二人でそう決めた。顔を赤らめ手を上げる彼女の仕草はとても愛しかった。

別れ話を切り出した時。彼女は、分かった。今までありがとう。泣くでもなく、あっさりと言った。帰り際、駅の改札で彼女が見送ってくれた。満面の笑顔で。こいつ悲しくないのかよ。俺はそう思った。彼女は俺の姿がエスカレーターから消えるまでずっと、高々と掲げた左手を振っていた。

マイ・コクピット

完璧だ。

パソコン。テレビ。音楽プレーヤー。

ミニ冷蔵庫。耳かき。爪切り。孫の手。等々。

座りながらにして全てのアイテムに手が届く。

私は子供の頃から自分の居場所をコクピット状態にしないと気がすまないのだ。

新居に越して、やっと念願の書斎を手に入れた。

少しずつ手を加えて完成したマイスペース。

屋根裏部屋だが文句はない。

これで誰にも干渉されずに読書や書き物に没頭することができる。

私はバング&オルフセンのプレーヤーにCDを入れ、翻訳ミステリーを読み始めた。

アール・クルーの優しいギターの音色がシルクのようにそっと私を包み込む。

まさに至福のひとつときだった。ただし、ノックの音がするまでは。

「入るわよ」

不機嫌そうな声と共に、妻が部屋に入ってきた。

「なにか用かい？」

「用かい？ 今日とは町内会の草抜きとゴミ拾いの日じゃないの」

「ああ、そう言えば……」

すっかり忘れていた。

「まだ越して間もないんだから、そういう地域の奉仕活動には積極的に参加しないとダメじゃない」

なら、君も――

口を開きかけてやめた。わざわざ火に油をそそぐことはない。

「あなたが家に居るのは日曜日だけでしょ。だいたいあなたはいつも――」

またはじまった。おまけに今日は長くなりそうな気配だ。

急遽、耳をスルーモードに切り替えたが、彼女の鬼神のような表情を見ているだけで気が滅入ってくる。

ふっと部屋が薄暗くなる。天窓から覗いていたお日さまも恐れをなしてか姿を隠してしまったようだ。

これでは、せっかくの休日が台無しだ。

知らず知らずのうちに私の右手は伸びていた。

プシュッ。

ボンッ。

私の身体は空高く舞っていた。

チェアに仕込んだ強化スプリングに弾かれ。天窓を抜け。

そう。緊急脱出用ボタンを押したのだ。

あなたがたもコクピットを作るなら、これだけは設置しておいたほうがいい。

一見、平穏な日常でも、何が起こるか分からないからね。

私は今、病院のベッドの上でこの文章を書いている。

何？ その後、妻にお仕置きされたのかって？

いや、パラシュートを付け忘れただけさ。

シロ

野良犬のグループが徘徊していると保健所に通報があった頃にはすでに町中に新型の狂犬病が蔓延していた。

うちのシロにも。

現在有効なワクチンは存在しません。確認されている限り、致死率は100%です。

やたらと水を欲しがると、妙にぐったりとしているので獣医に連れていったところ、そう言われた。

発症後は約5日～7日間もがき苦しみながら死に至ります。どうか楽にさせてあげてください。

俺は考えさせてくれと言ってシロを連れて帰った。

獣医には必ずここに入れておくようにということで檻を貸してもらった。

囚われの身となったシロの目はいつも以上に潤みがちで、舌はだらりとだらしく地に落ちていた。

食欲はまったくないようだった。とりあえず水をやり、様子を見ることにした。

明くる日、シロは豹変していた。

俺が近寄ろうとすると、猛然と吠えかかり牙を剥くので、水を取り替えてやることも出来なかった。

俺は一時間ほどじっと檻の前に座り込んでいた。その間もシロはずっと猛り狂い、吠え続けた。

何度も檻に体当たりをした。それでいて疲れる様子もなかった。

あれほど美しかった白い毛並みはしだいに薄汚れ、鉛色にくすんでいった。

俺は檻を車に載せた。

街並はシロを散歩させている時となんら変わらぬ表情で窓の外を通りすぎてゆく。

ただそこに、ひとけだけが無かった。

保健所の駐車場に着いた。

後部座席から下ろそうとしたところで俺は檻を取り落としてしまった。

そのはずみでロックをかけていたはずの扉が開いた。

シロが身をくねらせて檻から飛び出してくる。

固まる俺の目の前で、シロは涎を撒き散らし、唸り声を上げる。もはや目の焦点すら合っていない。

それはもうシロではなかった。

シロが襲い掛ってきた。

俺はとっさに腕を交差して顔を守る。

身体の側面を風が駆け抜ける。

背後でもみ合う音と犬の悲鳴が聞こえる。

振り返るとシロが野良犬を地面に組み伏せ喉笛を喰い破っていた。

野良犬の首からはごぼごぼと鮮血が噴き出している。

二、三度痙攣したかと思うと野良犬はただの肉塊となり果てた。

シロは血まみれの顔を上げる。

澄んだ目で俺を見つめる。

子犬のように心細そうに何かを訴えかける目だった。

俺は家に来たばかりの頃のシロを思い出した。

無意識に手を差し出してシロに一步近づいた。

シロはぐるりと身を翻しアスファルトを蹴った。

風のように駐車場を駆け抜け、低い姿勢で生垣を潜り抜けて行く。

シロは消えた。

俺は野良犬の骸の前でただ立ち尽くしていた。

翌月にはワクチンが普及し、新型狂犬病は沈静化した。

あれからもう一年が経つ。

俺はまだシロの小屋を片付けられない。

夕焼け部

「ねえ、あなた。あの子ったら、高校で夕焼け部を作ったらしいわよ。川の土手とか学校の屋上から、ただひたすら夕焼けを鑑賞するんですって」

「そうか。さすが君の娘だね。学生の頃、日が暮れるまでずっと飽きもせずに夕日を眺めていた君の後ろ姿を思い出すよ」

「なに言ってるの。元部長さん」

ファイアーバード

熱い。額から汗が滴ってくる。ネックを握る俺の指先にまで熱が伝わってくる。
俺の名はジョニー。控え目なスモークに包まれながらスポットライトを浴びていた。
まだ今夜のステージは始まったばかりだ。

客席に目をやる。笑顔が跳ね返ってくる。こいつらが喜んでくれるのが何よりの報酬だ。
今日も最前列の席には仕事帰りと思しきサラリーマンやOL達が並んでいる。
客の年齢は総じて高めだ。まあ俺たちのスタイルを考えたら当然だろう。

さて、そろそろ指も温まってきたようだ。
俺は後ろを振り返る。タイトなリズムで刻んでいる仲間目配せをする。
さあ、テンポを上げて行くか。俺は腹の底から声を搾り出す。

「いらっしゃいませっ！」

店の名はファイアーバード。
常連客と仲間にもまれた焼き鳥屋の厨房。
そこが俺のステージだ。

Bar「LOST」

行き付けのスナックを早めに切り上げ、駅に向かって歩いていると、ある雑居ビルの二階の窓が目に入った。薄汚れたガラスから漏れる黄色い明かりは弱々しく、暗闇にぼんやりと滲んで見えた。私はふらふらと吸い寄せられるようにビルに近付き、気が付くとその店の前に立っていた。

会員制バー LOST

煤けた金色のプレートにそう書かれている。会員制なら仕方がない。諦めた私は踵を返し、階段を降りようとした。だが、その足が意思に反して止まる。不思議と後ろ髪をひかれるような気がしたのだ。

しかし会員制だ。しばし逡巡する。

覗くだけでも覗いてみるか。私はぐっと息を吸い、思い切ってドアをノックしてみた。だが返事はない。ええい、ままよ。私は色の剥げた金属製のノブを握り、静かにドアを開けた。

「あのお……」

すると黒いベストを着たバーテンの男がすっと歩み寄ってきた。

「失礼ですがお客様、当店は会員制となっております。どなたか会員様からのご紹介でしょうか？」

「いえ、外からこちらの窓を見て、ちょっと気になったもので」

「基本的に、一見で新規のお客様はお断りしておりますが——」

男は私の風体をちらりと見て続ける。

「お客様が、私どもの条件に該当されるようでしたら、特別に入店していただいても構いません」

「じょ、条件と言いますと？」

「当店では“何かを失われた方”のみ入店していただいております」

男は急に小声になり、私の耳元に顔を近づけた。

「あちらのカウンター一番奥の男性は、長年連れ添われた奥様を亡くされました。真中のご夫婦は可愛がっていた愛犬を亡くされたばかりです。手前の男性は、交通事故で片足を——」

「……」

私は突拍子も無い話を聞かされ、思わず言葉を失った。

「条件を満たされたようですね。ではどうぞこちらへ」

男は呆然とする私の背にそっと手をまわし、カウンターの開いている席へと案内した。

「うちのかぞく」

うちのおとうちゃんはドラえもんです。

はたらきませんといつものでかえってきからに！と、おかあちゃんはいつもおこっています。

おとうちゃんはいつもよっぱらっているなとこでねています。

だいどころとかおふろとかトイレとかげんかんとかでねています。

よくそんなところでねれるなあとうちはおもう。

おとうちゃんがいつまでもおきないと、いっぺんドラえもんになるか！あんた！

と、いっておかあちゃんはほうちょうをおとうちゃんのゆびにたたきつけます。

めっちゃこわいけどうちはめがはなせません。

おとうちゃんはとびあがっててえをおさえて、かんにんや！かんにんしてくれー！と、いいます。

なんかいもおんなじことするからや！と、おかあちゃんはいいます。

いまはもうおとうちゃんのゆびはありません。あしもてえもぜんぶゆびがありません。

だからうちのおとうちゃんはドラえもんです。

おとうちゃんはいつもおしいれでねています。

うちのおとうちゃんはあほです。

おかあちゃんにはないしょやで。と、うちにいっておさけをおしいれにかくしています。

ほんまあほやとおもいます。あーさくぶんをかくのはめっちゃしんどい。

でもおかあちゃんがおこるからうちはちゃんとしゅくだいをします。

うちがわるいことをするとおかあちゃんはめっちゃおこります。

あんたはドラミちゃんになるんか！と、おかあちゃんはいいます。

うちはいやや！っていいます。

なんでかっていうとドラミちゃんはかわいいけどゆびがないからです。

ゆびがないとあそばれへんししゅくだいもできひんしおかあちゃんにおこられるからです。

だからうちはしゅくだいをちゃんとするしちゃんとさくぶんをかきます。

ゆび2ほんだけでかくのはめっちゃしんどいけどうちはちゃんとしゅくだいをします。

ちゃんとしてたらおかあちゃんはめっちゃやさしいです。

ドラミちゃんはいやや。おかあちゃんうちをドラミちゃんにせんといて。

おわり

最後の男

リカルドは呟く。

よもや僕が、地球上に残された最後の男になろうとは――

だがリカルドは、悲観することもなく、わりと気ままに毎日を過ごしていた。電気は屋根に取り付けられたソーラーパネルから供給されるし、食料や飲料水は捨て置かれたショッピングモールに行けば売るほどある。(もちろん売る相手はいないのだが……)

リカルドはこの日も部屋で一人、カウチに座り、録り溜めたテレビ番組をヴァーチャスコープで楽しんでいた。

「うあっははは！ こいつは傑作だ！ ははっ、はっ、はあ……」

リカルドは肩を落とした。それは、ときおり寂しくなることもある。家族との団欒を思い出したり、恋人のマリアのことを考えてみたり。それに、学校の友人達は皆元気にしているのだろうか。リカルドは力の無い手つきでヘッドフォンとスコープを外した。

その時。ノックの音がした。

また来たか。リカルドはゆっくりとドアに歩み寄る。そして、その上で這いつくばった。

『リカルド、いい加減にきなさい』

床に埋め込まれたドアの下から母親の音がする。

『あなたもさっさとこっちの世界へ来なさい』

「嫌だね。僕が暗い場所苦手なの知ってるだろ」

『リカルド。あなた紫外線に焼かれて死んでもいいの？』

「暗さに怯えて死ぬよりはいいね。それに防護服だってあるんだから大丈夫さ」

ふうっ、と母親の重たいため息が床に響く。

『いくら室内だと言ってもね、紫外線は入ってくるの。だから世界中の人々が地下に潜って暮らしているでしょ。ねえリカルド。いい子だからママの言う事を聞いて』

「嫌だ」 リカルドは寝そべったまま首を横に振った。

『世界中見回しても、もうあなただけよ。地上に残っているのは。お願いだから早く降りてきて……』

近年。地球上に降り注ぐ紫外線の量が急激に増大した為、人類は皆、地球下に避難してしまったのだ。もはや地球上に残っているのはリカルドだけだった。

「前向きに検討しておくよ。ママ」

リカルドは下を向き、小さくそう言った。

帰り道。

彼が持つ傘はずっとわたしの方へ傾いでいた。

濡れちゃうよ。と何度言っても彼は、大丈夫大丈夫。と軽い調子で優しい嘘をつく。

やがてわたしたちは駅前に着いた。

少し話をしたあと、黙り込んだ彼は、わたしにそっと顔を寄せてくる。

「人に見られちゃうよ？」

「大丈夫大丈夫。傘で隠してるから」

ん。わたしは目を瞑る。

嘘つき。

それ、透明の傘じゃん。

蝉

引きこもっていた。

五年間だ。

髪や髭は伸び放題。体重は二十キロ増えた。

何度も働こうとしたのだが、電話がかかけられない。

履歴書が書けない。書けるような職歴もない。

ハローワークの前まで行くと汗が噴き出し、心拍数が上がる。

いつのまにか、人との接し方が分からなくなっていた。

見かねた両親は親戚に相談した。

俺はその親戚の紹介で、小さな工場に勤務することになった。

ほとんど人と会話をする必要はないそうだ。しかも夜勤のみのシフトで構わないという。

近所の人間と顔を合わせずに済むのはありがたかった。

自分で髪をバリカンで刈り、髭もきれいに剃り落とした。

啞然とした。これが俺の顔か。

鏡に映る自分の顔が異物にしか見えなかった。

鏡を見る事自体が久しぶりだった。

俺は顔を鏡面に近づけ、やや茶色がかった瞳を覗きこんだ。

学生や社会人だった頃、たしかにそこにあった光は、欠片も残ってはいなかった。

濁った沼が、静かに部屋の蛍光灯を反射していた。

ただそれだけだった。

☆ ☆ ☆

初出勤の日から遅刻する訳にはいかない。

ちゃんと出来るというところを見せなければならない。

着替えや水筒を入れたスポーツバッグを担ぎながら駅までの道を急ぐ。

何かが視界の端で動いている。

セミの幼虫が、歩道の縁を、のそりのそりと歩いていた。

月の光を跳ね返す薄茶色の球体。

俺は立ち止まり、その場にしゃがみこんだ。

スロウな歩みでそいつは進んでゆく。

頑張れよ。街路樹は、すぐそこだ。

俺は、渴いた口の中で、ぎこちなく言葉を転がす。

だが、樹の根元まであと数センチというところで、ぼつりぼつりと現れた黒い点が幼虫にまわりついた。

それが合図だったかのように、地面のいたるところから蟻達が湧き出してきた。

黒い嵐は瞬く間に増幅し、幼虫を覆い尽くそうとした。

蠢く黒衣を背負いながらも幼虫は、重戦車のように前へ進み続けた。

地表に張り出した街路樹の根に幼虫の前足がかかる。

だが、黒の集合体は圧倒的な質量で、ついに幼虫を飲みこんだ。

根を掴んでいた前足のフックが外れ、幼虫は背中から地面に転がり落ちた。

音はしなかった。

一度は分散した蟻達が、仰向けになった幼虫の腹を狙い、次々に襲いかかってゆく。
鋭い鉤爪を持つ幼虫の前足は蟻達を攻撃する事もなく、虚しく空を搔いていた。
やがて動きは収まった。前へ進もうとする力は永遠に失われた。
幼虫の腹からほとぼしる黒い濁流が地面に川を作りはじめた。

俺は腰を上げ、歩き出した。
駅へ向け歩を進めながら、薄ら寒い月明かりに自らの手をかざす。
指先の鋭いシルエットが月に浮かんだ。
爪を切り忘れていた。

この先、待ち受けているもの。
越えなければならないもの。
着実に、一歩ずつ進めば――
進めば――

突然、汗が噴き出してきた。
俺はバッグを放り投げた。

もう一度空を見上げる。
月は黒い雲に包みこまれようとしていた。

俺は叫んだ。

何度も、
何度も、
喉を掻きむしり、叫び続けた。

声は出なかった。

Googleタイムトラベル

Googleタイムトラベルβ版がついに始まった。Enter。あたしは画面に吸い込まれる。まばゆい光。衝撃。——1993。夏。確かにあたしはこの海岸にいた。いた。あたしだ。「ちょっとあんた」「お姉さん誰?」「今すぐここから立ち去るの」「はあ?」「シミになるのよ!」

「じゃ母さん、面接に行ってくるよ」

「はい。頑張ってきてね」

わたしは笑顔で息子を送り出す。

引きこもり生活から抜け出そうと奮闘する息子の姿を見ていると思わず目頭が熱くなる。

さあ、電話しなきゃ。

「今から息子が伺いますのでよろしくお願いします。ええ。不採用で」

わたしはぜったいに息子を手放さない。

タレント作家

今日は夜の報道番組に出演する日だ。

役割はコメンテーター。作家でありながらフレンドリーでソフトな雰囲気。幅広い年代の女性の心を掴む爽やかな笑顔と、カジュアルかつ上質なファッション。バカな若者たちにも共感させる分かりやすいコメント。そして、時には軽くボケを挟み、場を和ませる事も肝要だ。白髪混じりのキャスターの残尿感溢れるツッコミや、足が綺麗な以外に何のとりえもない女性アシスタントの的外れな相槌にはまったく辟易するが、この手のテレビ出演のおかげでお茶の間に浸透する優しくて頭のいいお兄さんのイメージはなんとも捨てがたかった。その虚像ともいえるイメージで(実際はかなり辛口で腹黒い)、作品の売り上げが伸びているのも事実なのだ。これでさらに今回候補となっている直木賞を受賞すれば――

タクシーの後部座席で、窓の外へ向けた視線が思わず遠くなる。

おっと。いかん。テレビ局へ着いたようだ。私は口元に伝いそうになった涎をジャケットの袖でぬぐうと、そびえ立つ高層ビルの前に颯爽と降り立った。

出演者控え室に至るまでの通路で、何人もの関係者に話しかけられる。

「〇〇さんおはようございます」(朝でもないのに)

「今日もお洒落ですねえ」(聞き飽きたよ)

「僕にもファッション指南してくださいよお」(まず整形しろ)

かけられる言葉は、いつもそんな調子だった。

もっとも私が心の中で突く悪態もワンパターンなのだが。(もちろん表面上は優しげなスマイルだ)

私は自分の名前の書かれた控え室に辿り着き、鏡の前のイスに静かに腰を下ろした。メイクの人間が来るまで、まだしばらく時間がありそうだ。ロビーで買った新しいタバコの封を切り、抜き出した一本を口の端に咥える。色あせたジーンズのポケットをまさぐり、見つけ出したオイルライターで火を点ける。鏡に映る自分の顔に向かって、ゆっくりと煙を吐き出す。今日はどうも番組に集中できそうにないな。明日の直木賞の選考会が気になってしょうがないのだ。明晩はスケジュールを空っぽにして、自宅で編集者達と電話待ちの予定だった。

直木賞は今回で三度目のノミネートだ。

今年こそは――

賞の事を考えると、心なしか胃がキリキリと痛むような気がした。

そして、明くる日の夜――

私とマネージャー、そして編集者が二人。男四人で待つ自宅のリビングで、張り詰めた空気を切り裂くように電話のベルが鳴った。私たちは誰が出る？ と視線を交錯させ互いを牽制した。結局、鳴り続けるコール音にしびれを切らせたマネージャーが渋々と立ち上がり、受話器を取った。メモを取りながら相槌を打つ彼の横顔からは、まったく何も読み取れなかった。

やはり、今年もダメだったのか。私は気付かぬ内に止めていた息をほおっと吐き出す。

両膝に手をやり、立ち上がろうとしたその時。マネージャーが受話器を下ろし、私の方を振り返った。

「先生！ 獲りました！」

その場にいた全員の動きが止まる。

18畳のリビングルームに息を呑む音が響く。

彼の口からこぼれ落ちそうになっている続きの言葉を、一同前のめりになって待つ。

「ベストジャーニスト、受賞です！」

閃光

ぽっと一瞬。暗闇に赤い火が灯る。
今夜も俺はベランダで煙を燻らしていた。

嫌煙家の嫁を持つと本当に大変だ。
家を出たところで最近は駅や公共施設等での喫煙スペースも減っている。
会社内は当然のように全面禁煙だ。喫煙ルームすらない。
オフィスビルが立ち並ぶ会社前の通りは路上喫煙禁止区域に指定されていた。
まったく愛煙家には肩身の狭い世の中だ。
会社近くのカフェで一服するのが唯一の楽しみだったのだが、なんとこの店まで今週から終日禁煙にするというではないか。

禁煙禁煙禁煙禁煙。
嫌煙嫌煙嫌煙嫌煙。

高い税金を払ってやってるのに、この仕打ちはなんなんだ。
もはや俺の聖域は我が家のベランダだけになってしまった。
怒りを乗り越して切なくなってくる。

俺は手すりから身体を離し、
ふっつと大きく煙を吐き出した。

母ちゃん。ごめんな、ベランダで。
あいつ、煙ダメなんだよ。
俺は線香に火を点け。
仏壇に手を合わせた。

老作家

「うーん。後野レイ先生か……。あの人も、もう80代だろう。大丈夫か？ かなりボケがきてるといふ噂だが」
「まかせてください編集長。タイタニックに乗ったつもりで」
「沈むだろうが！ バカモノっ！」

☆ ☆ ☆

わたしはタイタニックー
もとい、新幹線に乗り一路関西へ。芦屋の一等地にある後野邸を訪れた。

「後野先生、久々にショートショートを書いていただきたいのですが」
「よろしい。まかせなさい」
白髪白髭。重厚な着物姿の後野先生は腕組みをしたまま鷹揚に頷いた。
「ありがとうございます！」
「善は急げだ。今書こう、やれ書こう」
「ええっ！？ 今すぐにですか？」
「わしは最近パソコンとやらを買ったばかりでな、練習中なのだよ」
久々の執筆一♪ などと陽気に口ずさみながら先生は仕事部屋に消えた。

大丈夫だろうか……。
わたしの頭に一抹の不安がよぎった。

☆ ☆ ☆

わたしが応接室で、出されたお茶をすすって待っていると、突然ドアが開いた。
「出来たぞい」
「ええ！？ もうですか？」
わたしは咄嗟に腕時計を見る。まだ20分しか経っていない。
戦前生まれの作家恐るべしである。

「おい、キミ、プリントアウトのやり方が分らん。ちょっと見てくれんか」
先生は手まねきをして、わたしを呼んでいる。
「はいっ、すぐに参ります」
わたしは恐縮しながら先生の仕事部屋へお邪魔した。

「連載当時と同じで五枚だったな。数えていないが、おそらくこんなものだろう」
先生の机に置かれたパソコンのディスプレイには作品が横書きで打ち込まれていた。
どうやらメモ機能を使ったようだ。
わたしは先生の了解を得た上で、文書作成ソフトを立ち上げ、原稿の体裁を整えた。

「ちょうど400字詰め原稿用紙に換算して5枚。2000文字の分量でした。さすがは後野先生ですね。ただー」
そこでプリンターが、音を立てて作動し始めた。

「ふふふ。わしが過去にどれだけの数ショートショートを書いたと思っておるんだ。身体が覚えておるよ。いいかキミ。熟練の寿司職人は、ひとにぎりでシャリの量を計ると言うな。数えてみると、いつも米粒の数が同じだそうさ。わしもその境地だよ。わっはっはっはっは。言うなれば、わしにとって作品は寿司。文字は米粒なのじゃよ。わっはっはっはっはー」
先生は大きな腹を抱え、のけぞるようにして笑っている。

わたしは先生の機嫌を損なわないよう、おそるおそる手を挙げる。

「先生、ひとつだけよろしいでしょうか？」

「なんじゃ」

先生の顔色が変わる。

わたしは額に流れる汗を感じながら疑問を口にした。

「この作品のオチがどの部分なのか、わたしにはさっぱり分からないのですが……」

「どれ、貸してみい」

わたしは刷り上がったばかりの原稿を先生に手渡す。

先生はロボットのような動きで首をひねった。

「ふむ。ネタを載せ忘れたか……」

折りたたみ式

警備員のアルバイトを始めて一週間。

やっと仕事にも慣れてきた。

だが一日中道路の上で立ちっぱなし。

足腰には疲れが相当キてる。

そして何よりも最大の敵は――

暑さだ。

今日もひたすらに暑かった。

まったく太陽の容赦のなさときたら！

焦げてしまうかと思った。

まだ五月なのにこの調子だと、夏場は一体どうなるのだろう？

はっきり言って不安です。

仕事が終わりに、事務所へ向かうハイエースに揺られながら、僕は先輩の宮本さんに相談してみた。

「夏場に体力が持つかどうか自信がありません」

「何言っとる！ 若えもんがよ」

宮本さんは、狭い後部座席で器用に腕を畳み、僕の背中をバシッと叩いた。

差し込む夕陽のビームの中。埃が舞った。

「よし。スタミナつけてやる。今日はウチに寄りな。故郷の高知からカツオを送ってきとるきに」

僕は気乗りがしなかったのだが、断りきれずに宮本さんの部屋へお邪魔した。

木造二階建ての寂れたアパート。

中へ入ると三畳ほどのキッチンに六畳の和室。

砂壁に寄せられたちゃぶ台。敷きっぱなしの薄い布団。

「ちょっと待ってろよ」

宮本さんは僕を台所に立たせたまま、布団を投げ飛ばすようにして畳んだ。

そのままの流れでちゃぶ台を部屋の真中にセットする。

「兄ちゃん、さっき腰が痛って言ってたな。俺もそうなんだ。まあこの仕事はしょうがねえよ。職業病だな」

宮本さんはそう言うと、部屋の隅から折りたたみ式の椅子を出してきた。

キャンプのときに使うようなナイロン製のディレクターズチェアだ。

「ほれ。これに座りな。座布団に座るより椅子の方が楽だろ？」

「いいですいいです！」

僕は手を振って辞退した。

「そうか？ なら俺が座るよ」

宮本さんは、ハァー疲れたなーオイ。などと声を出しながら椅子に腰を下ろした。

「やっぱりよ。狭い部屋で暮らすには折りたためるモノが一番よ。ちゃぶ台、椅子、布団。どれも折りたたみさえすりゃ場所を取らねえからな。もしこの部屋にベッドでも置いてみな？ 俺とベッド、どっちが部屋の主だか分かりやしねえ」

「そりゃそうですね」

苦笑いした僕はすっと部屋を見回して続けた。

「ところで宮本さん、ご結婚はされてるんですか？」

「ご結婚？ ご結婚はなあ。ああ、してましたよ。してたんだが、逃げられちまってなあ……。まあこんな狭い部屋じゃ、女房なんて居ても邪魔なだけだからよ」

宮本さんはそう言うと、ずずっと涙をすすり、日焼けで真っ黒な顔をくしゃっとしかめた。

「女房なんて、女房なんてよ……」

これは強がりなのだろう。きっと寂しいはずだ。

「でもいいんだ、今では――」

宮本さんは言いかけて、ごそごそとポケットを探る。

ま、まさか……。

「――これよ」

出てきたのは折りたたまれた紙片。

宮本さんは笑顔でそれを開いてみせる。

デリヘルのチラシだった。

エレベーター

がこん。という情けない音と共に突然エレベーターは止まった。僕は顔を上げる。階数表示のランプは消えている。閉じ込められたのは僕とOL風の若い女性。二人きり。極限状態に置かれた男女の間に恋が生まれる確率約92%。作業服姿の僕は今回も計画通り、肅々と彼女をモノにする。

悪魔に願い

今日こそは――

私は妻が寝静まったのを確認して、そろりとベッドを抜け出した。

暗闇の中、感覚だけを頼りに部屋を出る。

閉じたドアの音にヒヤリとしたが、どうやら妻が起き出す気配はない。

足音に気を付けながら廊下を進む。

突き当たりにあるドアを開け、手探りで壁際のスイッチを押した。

闇は消え去り、書斎が姿を現した。

私はデスク前のチェアに腰を下ろし、引き出しから空っぽのガラス瓶とスタンドミラーを二つ取り出した。

今日こそは悪魔を捕まえて、願いを叶えてもらうのだ。

昔読んだ短編小説に、悪魔の捕まえ方が載っていた。

夜の0：00きっかりに、合わせ鏡の間を通る悪魔をガラス瓶で捕まえる。

そうすると、悪魔は命乞いをし、一つだけ願い事を叶えてくれるそうだ。

私は痣だらけの身体をさする。

これで、あの暴力妻ともおさらばだ。

デスクの隅に置かれたデジタル時計の数字が刻一刻と明日に近付いてゆく。

23：58

まだだ、落ち着け。

23：59

感覚が研ぎ澄まされる。

0:00

出たっ！

私は無我夢中で手を突き出す。

やった！ 捕まえた！

あまりにもスピードが速かったのでまったく見切れなかったが、咄嗟に出した手の中に向こうから飛び込んでくれたようだ。

確かに握った拳の中で、もによもによと蠢く感触がある。

閉じた私の手をこじ開けようと悪魔がもがいているのだ。

私は悪魔を指の隙間から逃がさないように、注意深くガラス瓶の中に移した。

ゴム製の栓で念入りに蓋をする。

私はじっくりとガラス瓶の中身を観察する。

美しい。これが悪魔なのか……。

生まれて初めて目にするその姿は、ぞっとするほど美しく、しかも私の妻にそっくりだった。

小悪魔はスリムな肢体をピタっとした黒革のボディスーツで包んでいる。

小さな頭からは二本の角が、形の良いお尻からは、短い尻尾が生えていた。

こちらを睨みつけるその顔は、まさに私の妻と瓜二つだった。

これはいったいどういうことなのだろう？

カチャリと背後で音がする。

「あなた？」

「はうっ！」

恐る恐る振り返ると、そこには悪魔、いや、眉間に皺を寄せた私の妻がいた。

「こんな夜中に何をやってるの？」

「いや、なんでもないよ」

「じゃ、その机の上の鏡はなんなのよ」

「いや、こ、これは」

「何を隠してるの？」

「……」

「出しなさい」

私は胸の前で閉じた手を開き、ガラス瓶を妻に見せた。

「やっぱりそうだったのね。いいわ。それ貸しなさい」

妻が右手を私の鼻先に突きつける。

赤く長い爪が妖艶に光っている。

「分かったよ」

私は渋々とガラス瓶を差し出す。

受け取った妻は瓶の中の小悪魔に親しげに話しかけた。

「ダメじゃないお姉ちゃん。こんな男に捕まっちゃ」

「エへ、やっちゃった。でもあんただって五年前に捕まったじゃないの」

「まあね。お陰で苦労してるわよ。こいつの調教。記憶を消しといたから五年前の事は覚えてないはずなのに、また同じ事を繰り返すとはね。まったくバカ亭主なんだから」

いったいなんの話をしているんだ。私は頭が混乱してしまって、まったく話の内容がつかめなかった。

「人間の男が悪魔に一目惚れするなんてねえ。なんせ願い事が、僕と結婚してください。だったんでしょ？ マジでありえないわよね」

「言い過ぎよ、お姉ちゃん。ぱっと見冴えない男だけど、とにかく優しいし、意外に男らしい所もあるんだから。さあ、今から逃がしてあげるから、早く帰った方がいいわよ」

そう言いながら妻はガラスの瓶の蓋を開けた。

見目麗しい小悪魔は、すかさずするりと外に踊り出る。

「分かったわよ。じゃ、そこの旦那さま。妹を頼んだわよ。あ。そうだ。ところであんた、いったいわたしになんてお願いするつもりだったのさ？ せっかくだからその願い事、叶えてあげるわよ」

急にそう言われても、動揺している私に、願い事を口にする余裕などあるはずもなかった。

「いえ、もういいんです。私は一一、私は、これからも妻と仲良く暮らしますから。悪魔さんはどうぞ、鏡の中へお帰りください」

「あ~~~~~れ~~~~~！」

悪魔の姉妹は二人とも鏡の中に吸い込まれていった。

最近の若者

ちっ。リーチもかかりやしない。

わたしは煙草に火を点け、大きく煙を吐き出した。隣の客が煙たそうに手で扇ぐ。なんだ。感じの悪い奴だな。ちらりと横目で見る。裾の破れたジーンズ。かかとの踏まれたスニーカー。だらしない格好の若者だった。まったく最近の若いもんは。昼間っからパチンコなんか打ってからに。親の顔が見てみたいよ。視線を上げると汚らしい金髪が目に入る。案の定、悪そうな顔つきをしている。あまりこの手合いとは関わらないほうがいい。わたしはそそくさと自分の台に目を戻した。

いっこうに当たる気配がない。上皿の玉は川の流れるようにたおやかに流れ、台に吸い込まれていく。

今日はもう駄目だな。

玉が全て無くなり、席を立ちかけたところでリーチがかかった。

どうせ当たるはずがない。とは思いつつも絵柄の動きを目で追う。

ほら外れた。

と、突然絵柄が走った。ノーマルリーチの再始動。大当たり確定だ。

が、玉はもう一球もない。焦る。

慌てて財布を取り出そうとしたところ、隣の若者が自分の玉を鷲掴みにして、わたしの台の上皿に流し入れてくれた。

「す、すまんね」

わたしは気まずい思いでラウンドを消化していった。途中、ドル箱から玉を一掴みし、隣の若者に返した。

「ありがとう」そう言って一応軽く頭も下げる。

「良かったっすね」金髪の若者はこちらを向き、優しげな笑顔を見せた。

わたしは思う。

最近の若者も捨てたもんじゃない。

神と悪魔と宇宙人

むにゃむにゃ。

なんだかまぶしい……。

気がつく、目の前に、背の高いおじさんが立っていた。

「うわっ」 ぼくは驚いてベッドから転げ落ちそうになった。

「どうした少年。驚くことはない、これは夢の世界だ」

「お、おじさん、誰？」

ぼくが声を上げると、枕元に置いていた本が床に落ちた。

「わたしは神様だ。それよりなんだこの本は」

おじさんは長い背を折って、床から本を拾い上げた。

「それは図書館で借りたショートショートの本だよ。読みながらぼく寝ちゃったみたい」

「えらくまた古い本じゃないか」

おじさんは難しい顔つきで、ぱらぱらとページをめくった。

「だって、最近のショートショートは、ちっとも面白くないんだ。ぼくは、宇宙人やロボットや悪魔とか神様の出てくるお話が好きなのに、そんな話はもう飽きられちゃってて書く人がいないみたい。時々、そんな本を見つけても中身はどこかで聞いたようなお話ばかりだし……」

「ふむ。そういえばこの間、そんな話を読んだな。もっとも大長編だったが」

「ええっ!? 神様の住んでるところにも、図書館あるの？」

「もちろんある。図書館もマンガ喫茶もあるぞ」

「すごーい」

「その本の中では、宇宙人、悪魔、ロボット、それに神様、みな勢ぞろいだ」

「おもしろそう！」

「お前は、近頃の子供にしては珍しく本好きのようだ。よし、明日、その本を届けてやる。ただし――」

「うん！ ぼく、ちゃんといい子にする！」

「――送料は着払いだぞ」

……。

「分かったよ。 ぼく、お小遣いでなんとかする。神様、ありがとう！」

ぼくの返事を聞いたおじさんは、にた一つと笑って暗闇に消えた。

ぼくはそのまま朝まで寝ちゃったようだ。

学校が終わって家に帰ると、青と白の縞々シャツを着たお兄さんが、ダンボールを届けてくれた。

本当に着払いだったのでびっくりした。

箱を開けてみると中には――

ドラゴンボールが全巻入っていた。

ぼくは、マンガを抱えたまま自分の部屋に駆け上がって、夢中になって読んだ。

「荷物、何が届いたの？」

晩ごはんの時、ママに訊かれた。

ママの手にはダンボールに貼ってあった紙が握られていた。

「送り主：星新一、住所：天国。ってなってるわよ」

おじさんはショートショート的神様だった。

夏のテロリスト

夏のテロリストは団地の階段の踊り場から水風船を投下する。焼け焦げたアスファルトがずんずん冷やされてゆく。突如五階と三階で扉の開く音。甲高い怒声が響く。母Aと母Bに挟撃されたテロリスト達は呆気無く投降する。テロリストA宅で行われた尋問の後、捕虜どもに与えられたカルピスの中、氷がひとつキーンと鳴った。

甘い誘惑

お前らなあ、だっせえんだよ、なんだあの演奏は？
打ち上げはヤメだヤメ、反省会だこの野郎！
なんだその顔はオラァッ！
このバンドは俺で持ってるんだろうが！

ちょっと、ヤメなよ、てっちゃん。
店の人にも迷惑でしょ。

うるせえ園美！ お前は関係ねえええっ！

テーブルをひっくり返す俺の非力な手。ドアをラバーソールで豪快に蹴飛ばし店を飛び出したものの、すぐに足をもつれさせ、
がらがらと階段を転がり落ちる。口の中に鉄の味が広がる。

てっちゃん？ てっちゃん？ 大丈夫？

――頭蓋骨が軋む。暗闇。そしてフラッシュ。ホットケーキの甘い匂い。

てっちゃん焼けたよ。食べるでしょ？
ああ？ 今はいい。気持ち悪いからいい。
もう、飲みすぎなんだよ、バーカ。
あ？ うるせえよ。

園美。ホットケーキ食うなら冷蔵庫にメイプルシロップあんど。
あたし、ダメなの。メイプルシロップ。独特の香りというかクセがあるでしょ？
あっそ。バターもあったと思うぞ。
ありがと。あたし、先に食べちゃうよ。

また暗闇。

――軋む。頭蓋骨がみゅうっと音を立てて軋む。断続的に焚かれるフラッシュ。脳内スクリーンに流れるコマ切れのシーン。

ふっと現実に戻る。

もう十月だというのに、強い日差しがアスファルトの上に、俺の影を色濃く刻みつけていた。

俺は自分の影を追うように歩き続ける。

なぜだか鼻の奥深くに残るホットケーキの甘い匂い。

俺にとってそれは安息の象徴だ。

貧乏だった子供の頃、母親が食事代わりによく焼いてくれた。

今振り返ると、育ち盛りの子供の食事にホットケーキというのもどうかと思うが、当時の俺にとってこれは最高にお気に入りのメニューだった。

どうやら、そんな思い出話を何度か園美にしたようだ。

俺はよく覚えていない。

ある日いきなり。あいつはホットケーキミックスを買ってきた。

もう、フライパンがダメだから焦げちゃったじゃん。

などと言いながら園美は俺のアパートでホットケーキを焼く。何枚も焼く。

二日酔いだから食えないと言っているのに。

数ヶ月前の記憶が鮮明に蘇る。
俺は火の点いてない煙草をくわえたまま歩いていた。
日差しが急速に弱まり、足下の影がずっと消える。
空を見上げると、重そうな灰色の雲が太陽を覆っている。
だが、それでも俺の足どりは軽かった。

今日は二度目の一時帰宅だからだ。
酒を飲んでぶっ倒れた俺は病院に担ぎ込まれた。
即刻強制入院。アルコール依存症患者専用の病棟にだ。
勝手に出れない。酒を飲めない。これは、まったくもってやり切れない。
だが、俺は鉄の意志を持つ男だ。
でなきゃ、三十過ぎてバイトしながら、バンドを続けたりしていない。
いや、バンドは解散してしまった。
階段から落ちたあの日以来、他のメンバーとは連絡がつかない。
まあいい。とにかく、俺は鉄の意志で酒を断った。

もう一度言う。
一時帰宅は今日で二度目だ。
これは医者にも頑張りを認められているということだ。
退院もじきだろう。
もう依存症からは完全に脱却したと思う。
手の震えもない。これでまたギターが弾ける。曲が書ける。

——もう大丈夫。俺はもう大丈夫だ。
自らに言い聞かせるように呟く。
ジーンズのポケットの中で携帯が震えた。
園美からのメールだ。
「ゴメン。少し仕事で遅くなる。なるべく早く帰るから、家で待っててね」
「分かった」
短く返信する。

カンカンカンと澄んだ音を立て、アパートの階段を昇る。
久々の自分の部屋。
園美が定期的に掃除や空気の入れ替えをやってくれているのだろう。
長らく放置された部屋独特の埃っぽさは微塵も感じられない。

俺は畳の上に座り込み、煙草に火を点ける。
しばらくの間、思索にふける。
長い距離を歩いたせいか喉が渴いていた。
ビールは——
俺は立ち上がり、冷蔵庫を開ける。
ない。あるはずがない。

買いだめしておいた缶ビールは、全部、園美に処分されていた。
部屋の各所に隠しておいた酒も、全て発見され、捨てられた。
園美は面会に来た時、そう俺に報告した。いたってドライに、事務的に。

押入れの天袋。台所のシンクの下。

米びつの中。便所のタンク。All Of Them。おみそれしました。
あいつは探偵になれる。いや麻取やマルサでもいけそうだ。

しょうがない。

冷蔵庫から1.5リットルのペットボトルに入った緑茶を取り出した。

グラスに注ぎ、ぐいっと飲み干す。

ペットボトルをしまうとき、一つの瓶に気が付いた。

メイプルシロップ。

これは園美がホットケーキを焼くようになってから、俺が買ってきたものだ。

やはりホットケーキにメイプルシロップは欠かせない。

だが園美はメイプル独特の香りがどうにも苦手なようで、俺がいくら勧めても頑なに使おうとしなかった。

改めて記憶の糸を手繰る。

たしか園美の酒類廃棄報告に、こいつは入ってなかったはずだ。

自分でもすっかり忘れていた。

俺は、この瓶の中にも隠したのだ。

メイプルシロップの中身をウイスキーに入れ替えれば、園美は絶対に気付かない。

そう思った。

事実。気付かれなかったようだ。

目の前にある瓶の中身は、減っているようには見えなかった。

――もう大丈夫。俺はもう大丈夫なんだ。

俺は冷蔵庫の扉の部分に収まっている琥珀色の瓶にゆっくりと手を伸ばした。

緑茶を入れたグラスを水道の水でゆすぎ、魅惑的に輝く液体をおごそかに注ぐ。

おっと。

慌てて、手が震えて、思わずこぼしそうになる。

鼻腔をくすぐる芳しい薫り。

いや違う、これは……。

甘い香りだ。

中身は。

再び入れ替えられていた。

メイプルシロップに。

ただいまー。園美の声。

まずい。

てっちゃん、おかえー あ。バカっ！ また飲もうとしたな！

ち、違う、これはホットケーキをだな。俺はしどろもどろになる。

フフン。園美が鼻で笑う。

なんだ、そのどこかの首相のような笑い方は。

焼いといたから。

そう言いながら園美は、冷蔵庫からホットケーキの載った皿を取り出した。

本当に焼いていたのか。

飲み物ばかりに目がいて、まるで気が付かなかった。

ガスコンロの方を見ると、使い古したフライパンが置いてあった。

ほんの数秒。時間が止まった。

てっちゃん、あたし、メイプルシロップ克服するから。

園美は沈黙をそっと破り、小さくそう言った。

震える声で続ける。

だからお前も、克服しろよな。

振り返ると、園美の目に涙が浮かんでいた。

なぜだか俺は、鼻の奥がつんとなる。

ぐぐっと胸の底から熱いかたまりがせり上がってくる。

視界がぐわりとぼやけた。

園美、俺は、俺は、もう、大丈夫だ。

向日葵色のドレス

それは道の向こうからやって来た。

渴き切った街テキサスを横断する一本道。ルート66に寄り添う古びたドライブインカフェ。薄暗い店内では酒棚の上に置かれたおんぼろのスピーカーからスライドギターの気怠い音色が漏れていた。

ハンナは少しずつ大きくなる点を積年の汚れで薄曇った窓からじっと眺めていた。テーブルに肘を突き、飲み終えて空になったグラスを指で弄びながら。

やがて、地面に大きな弧を描いて駐車スペースに乗り入れたのは70年代製の黒のカマロだった。砂埃にまみれた大柄なボディが外界に降り注ぐ眩しい陽の光を鈍く反射していた。

運転席のドアが開く。磨きあげられたペコスブーツがまず大地を踏み、長身を折りたたむようにして男がカマロから降りてくる。ブロンドの短髪。ティアドロップタイプのサングラスをかけている。はだけたシャンブレイシャツの胸元からは、張りのある小麦色の肌が覗いていた。

男は店に入るなりカウンターに身を預け、ビールを頼んだ。喉が渴いていたのだろう。男は目の前に出されたジョッキを一気に飲み干した。男はそこでやっと一息ついたように店の中を見回した。と言っても客は、カウンターの端にトラックドライバーが一人。あとは窓際のテーブル席にハンナが座っているだけだった。

男はハンナの方へ顔を向けた。筋張った大きな手でサングラスを外すと、厳しい表情をすっとゆるめた。

「お嬢さん、一杯いかがですか」

その申し出は穏やかな微笑とともにハンナへ贈られた。

「いただきますら」

ハンナも控えめな微笑を男に返した。

「お好みはあるかい？」

ハンナは男の問いかけに、ほんの一瞬、天井へ目をやった。そして、あらかじめ用意していた台詞のように、こう答えた。

「あなたにまかせるわ」

男は無言で頷き、カウンターを振り返った。

「モヒートを二つだ」

「モヒート？」

ハンナは尋ねた。

「ああ、ヘミングウェイが愛したカクテルだ」

「そう」

「バカルディラムにライムジュース、それにソーダ。ミントの葉があれば尚いいが、そこまでは

求めない。ここはテキサスだからね」

男はカウンターでグラスを二つ受け取るとハンナの待つテーブルへ席を移した。

「君のドレス、とてもいい色だ。陽の光を浴びた向日葵のようで眩しいくらいだよ」

男はふっと目を細め、サングラスをかけるふりをする。

「ふふふ、いやだ」

ハンナはポンと軽く男の肩を叩いた。

「おお」男は自分の肩を押さえ、ひどく痛そうな表情をする。

その姿がなんとも滑稽で、ハンナは吹き出してしまった。

それを見た男も大げさな演技をやめ、白い歯を見せる。

「本当に。明るい君の笑顔によく似合ってる」

「ありがとう。お世辞でも嬉しいわ」

二人は顔を見合わせ、にっこりと笑った。

この後、グラスが空になるまで、二人の会話は途切れることがなかった。

「——おっとすまない、お代わりを頼もうか」

「そうだわ」ハンナは人差し指で立ち上がりかけた男を引き留める。

「それよりもあなた、お腹空いてない？ 近くに美味しいメキシコ料理の店があるの」

「そう言われてみると、俺は朝から何も——

——やあ、ハンナ」

白昼夢は突然。しゃがれた声に破られた。

「ご機嫌はいかがかな？」

「あら、チャーリー、とっても良くってよ」

ハンナは夢の残像をかき消すように咳払いをする。

「そいつは良かった」

「あなたはどうぞ？」

「ああ、ぼちぼちだね。それよりもハンナ、一杯奢らせてくれよ」

「そんな、いつも悪いわ」

「なに、遠慮することはないさ」

町外れにあるガソリンスタンドのオーナーであるチャーリーはハンナの幼馴染みだった。顔を合わせるたび彼はハンナに飲み物を奢ろうとする。ハンナが何度断っても決して聞き入れようとはしなかった。なにしろ彼にとってハンナは初恋の人だったのだ。

もっとも、それはもう七十年も前の話だが。ハンナもチャーリーも生まれてこの方、ついに町を出ることがなかった。ハンナがこのカフェで運命的な出会いを求め続けてはや数十年。時は渴き切った風になり、彼女の目の前を何度も通り過ぎていった。

ハンナは皺だらけのチャーリーの手からテキーラを一滴落としたコーヒーを受け取った。ハン

ナは窓の外をちらりと見、ふっと一息、マグの中身を吹く。漆黒の表面に起きたさざなみが湯気をかすかに震わせる。だが、いつもと何ら変わらぬ彼女の日常は、いささかも揺るぎはしなかった。ハンナはチャーリーに聞こえぬように、ぽつりと呟いた。

今日も世はこともなし、ね。

二次元萌え！

『特集です』

男性キャストの声のバックにアニメソングがかかっている。

タカユキはBGMがわりにつけっ放しにしていたテレビの方へ目をやった。

『近頃、アニメやゲームのキャラなど二次元の女の子に恋をして、生身の女性と恋愛の出来ない若い男性が増えているそうです』

画面が切り替わり、VTRが流れはじめる。パソコンショップの立ち並ぶ街でインタビューを受けている若者たち。どれもこれもモテそうにない顔ばかりだった。タカユキはイスを回転させ、テレビの方に向き直る。映像がスタジオに戻された。メガネのキャストとコメンテーターの作家が、いかにも台本通りといったやりとりをしている。

『いや一困ったものですねえ。このままではますます少子化に拍車がかかってしまいますよ』

『部屋の中で引きこもっている若い人はとにかく外へ出てみましょう。素敵な出会いは意外と近くにあるのかもしれませんがよ。しょせん二次元の女の子との恋愛が成就することはありませんから、早く現実の世界に目を向けてもらいたいものですね。では、次はお天気予報です——』

バッカじゃねーの。

タカユキは罵りの言葉をつぶやいた。だいたい三次元のオンナなんて面倒くさいんだよ。実際、メールとか電話とかデートとか考えただけで気持ちが萎えてしまう。二次元萌えの何が悪いんだ。性欲だってネット上で解決できてしまうんだから、リアルに女の子と触れ合う必要性なんかまったく感じない。第一、裸で抱き合っただけのセックスなんて気持ち悪くてしたいとも思わない。他愛ないテレビの特集コーナーがきっかけとなり、タカユキの思考は一気にあふれ出した。

リモコンでテレビの音を消したもののタカユキの頭のざわめきは収まらない。タカユキはイライラする気持ちを洗い流すように、マウスパッドの側に置いたグラスを一気に呷った。Youtubeでアニメの動画を見ながら晩酌をしていたのだ。と言っても中身はオレンジジュースなのだが。タカユキは20歳になった今でもアルコールを美味しいとは思えなかった。毎晩のように酔っ払って帰ってくる父親を見ていると別に飲みたいとも思わなかった。コンビニのアルバイトから帰ると、引きこもり気味にディスプレイに向かう日々。二次元の中の世界が一番落ち着きます。さっきのインタビューでそう答えている学生がいた。タカユキはうなずく。まったく同感だった。

☆ ☆ ☆

素敵な出会いが犬のウンチのように道端に転がっているはずなどない。それが一般的な常識だ。おとぎ話みたいなテレビドラマに騙されてはいけない。ところが、ある日のことだった。タカ

ユキがいつもと違う道のりでバイト先へ向かっていると、酒屋の自動販売機の隣に一人の女の子が立っていた。こんがりと日に焼けた健康的な肢体。こぶりなパーツがバランスよく配置された上品な顔つき。そしてそこに浮かぶ眩しい微笑み。

惚れた。0.2秒で惚れた。タカユキは一発で胸を撃ち抜かれてしまった。

酒屋の店先に立つ彼女はまさに夏の女神、まごうことなき看板娘だった。

一方、通りのど真中で立ち止まり、等身大のキャンペーンガールの立て看板を腑抜けた顔つきで見つめているタカユキは、明らかに街の異物だった。道行く人々は怪訝な顔でタカユキに視線を向け、関わり合いになりたくないと目を逸らしてゆく。

その日からタカユキは毎日、酒屋の前を通り始めた。いっそのこと彼女を小脇に抱えてどこかへ走り去ってしまおうか。とも考えたが、人目のある通りでそんな目立つ行為が出来るはずもなく、結局行き場のないタカユキの想いは日に日に募っていくばかりだった。

どうすればいい？ なんとか彼女と一緒に暮らす方法はないだろうか？

タカユキはインターネット掲示板で知り合った人物とある取り引きをした。オンラインゲームで集めてきた武器やアイテムを彼に差し出す代わりに、強力な魔法を譲ってもらったのだ。この魔法さえ使えば、彼女に触れ、彼女と言葉を交わし、彼女の手を取って、そしてそしてそして――

タカユキの妄想と股間はいっきに膨らんでゆく。

ああ、もう！

さあ、明日決行だ。

☆ ☆ ☆

タカユキはとっておきのTシャツを下ろし、ユニクロで買ったばかりのジーパンを穿いて家を出た。

知り合いに会うこともなく無事現場に辿り着く。ラッキーなことに酒屋の周りには人っ子一人いない。

タカユキは早速、いとしの彼女の前で必死に覚えた魔法を唱えた。

「ジゲンニジゲンサンジゲンイチゲンサンハオコトワリ！」

ふつつむじ風が巻き起こり、どこからともなく吹き出した白い煙がタカユキを包み込んだ。

☆ ☆ ☆

酒屋の前を一人の主婦が通りかかった。

あら。看板が変わったわねえ。

いつのまにかカップルになってるじゃない。

女の子は変わらないけど、隣の男の子は……、誰？

水着姿の彼女に腕を組まれ、タカユキは満面の笑みを浮かべていた。

ふとましい右手には誇らしげに大ジョッキが握られている。

もっとも、その中身はオレンジジュースなのだが。

お引越し

会社の先輩に引越しの応援を頼まれた。知り合いの手伝いだそうだ。

当日、ぼくはレンタカーのトラックで隣町に住む先輩を拾い、目当てのマンションに向かった。

「悪いな成瀬」

「いいんですよ。どうせ暇してましたから」

「飲み屋の姉ちゃんなんだけどな。最近離婚したらしくて部屋を引き払うんだと」

「またそんな人妻に手を出してー」

「うるせーバカ野郎。それに、もう人妻じゃないだろ」

マンションのエントランス前で先輩がインターホン越しにやりとりをする。

ロックを解除してもらい、ぼくらはエレベーターで階上に昇る。

開いたドアの隙間から小さな顔がのぞいた。

「おはよう。どうぞ入って」

ジーンズ姿の小柄な女性は小花柄のスリッパを二つそろえて僕らの足元に置いた。

「ごめんね長谷川さん、お休みの日なのに」

「いいんだいいんだ。今日は若いのも連れてきたからさ。まあ馬力はねーけど」

「よけいなお世話ですよ」

ぼくはしかめっ面で隣の先輩をにらみつける。

「ありがとうございます」 彼女は言いながら笑いをこらえていた。

「こいつは会社の後輩で成瀬」

「成瀬です」

「めぐみです。今日はよろしくおねがいします」

夜の仕事をしているという割りには、めぐみさんの化粧はあっさりとしたものだった。

「こちらこそよろしくおねがいします」

ぼくは頭を下げながら「めぐみ」は源氏名なのかな等とくだらないことを考えていた。

新築マンションのようにフローリングがつやつやと光っている。

引越し前の部屋にしては妙にがらんとしている。

唯一キッチンのすみっこで大型冷蔵庫が存在感を主張していたが、他に大物は見当たらなかった。

訊くと家具家電類は業者に頼んですべて引き取ってもらったのだそうだ。

きっと過去の思い出を引きずりたくなかったのだろう。

まだ使えるものを売ってしまうのはもったいないような気もしたが、その気持は分からないで

もなかった。

小さな荷物はみなきれいにパッキングされ、すでに運び出すだけになっていた。

ぼくは目を離すとすぐにサボろうとする先輩の尻を叩きながら運搬マシンとなりせっせと身体を動かした。

ダンボール類をすべて運び終えたあと、先輩がキッチンで素っ頓狂な声を上げた。

「あれ？ この冷蔵庫、電源入ったままだぞ」

「いいの、それは置いていくから」 めぐみさんは慌てたように言う。

「ふうん」 長谷川先輩は怪訝な顔をする。ぼくも不思議に思った。

さっき「冷蔵庫の中のもの」と書かれたダンボールを運んだばかりなのに。

だが先輩はそれ以上なにも訊こうとはしなかった。

その後、傘や額縁など細々としたものを運び出すと、部屋の中はすっきりきれいに片付いた。

「忘れ物ないか」

「大丈夫。あってもしばらくの間は契約残してるから、また取りに来れるし」

「そっか。じゃあ行こう、新天地へ」

先輩に手を取られ、さよならも言わずにめぐみさんは部屋をあとにする。

ドアを支えてふたりが出るのを待っていたぼくは、閉じる時、無意識に耳を澄ませた。

部屋の奥で冷蔵庫が、ぶーんとうなり声をあげたような気がした。

傘がない

傘がない。

コンビニから出て傘立てに手を伸ばそうとしたのだが、ない。傘がないのだ。

わたしは途方に暮れる。店内にいた客はわたしだけである。すれ違いに出て行った客もいない

。

店の前でたむろしているような若者もいなかった。いったいどうしたことだ。

わたしはあたりを見回してみる。

雨なのに駐車場の隅で掃き掃除をしている店員がいた。

しかもわたしのものらしき水色の傘を差しながら。

わたしは雨に濡れるのも気にせず、つかつかと店員の元へ歩み寄る。

「君、それはわたしの傘じゃないのかね」

「あ。すみません」

まだ十代とおぼしき彼女はぴよこりと頭を下げると、傘ではなくほうきをわたしに手渡した。

「そうそうこれこれ。これをこうやって差してな。さすがほうきだけに水はけがええわ。ってアホか」

わたしはついついノリ突っ込みをしてしまう。

彼女は一瞬固まったあと吹き出した。

身体をくの字に折り曲げたままくつくつと小刻みに震えている。

どうにも笑いが止まらないようだ。

「おい君、だいじょうぶか」

「はあー苦しい」 顔を上げた彼女は制服の袖で涙を拭う。

「意外とノリいいんですね」

「そうでもないよ」

わたしは整った彼女の顔から目をそらし、咳払いをする。

「笑ったらおなかすいちゃった。あたし、もうバイト上がりなんですけど、ごはんでも食べにいきませんか？」

「ああ、かまわないが」

「やった」

彼女はわたしにたたんだ傘を押し付けると、店に向かって駈け出した。

毛先のなびいたほうきと水色の傘を手に、わたしはひとり駐車場に立ち尽くす。

いつのまにか雨は止んでいた。

Morning Delight

「あなた、忘れ物よ」

「おお、すまんすまん」

「もう、ヘルメットを忘れたらダメじゃない」

「それはそれで気持ちいいだろうが、逮捕されてしまうな。ハハハハハ」

妻の笑顔に見送られ、わたしは目覚めたばかりの街に足を踏み出した。

きりりと冷えた空気がすがすがしい。

ぶるん。

両手で引き裂いたように静寂が破られ、V型エンジンの不規則な鼓動が響きだす。

重低音に腹が揺さぶられる。

艶やかに光る黄色いタンク。

ハーレーダビッドソン883スポーツスター。

お隣のご主人だ。

わたしは軽く頭を下げて挨拶する。

鞭を入れられた鉄の馬は大地を強く蹴り、見る見る間に遠ざかってゆく。

ハーレーで通勤とはまったく羨ましいかぎりだ。

わたしはヘルメットを被り、駅へ向かって歩き出した。

バイク用のヘルメットと比べると、ひとまわりサイズが大きい。

だが軽量に作られているため、それほど首に負担はかからない。

それに全体がクリア樹脂製なので視界は良好。圧迫感もなかった。

分かりやすく言うと、大きな金魚鉢を被っているようなものだった。

わたしは口の前の部分のカバーを上をスライドさせ、煙草を啜める。

火を点けると、すぐにカバーを閉める。

ふう。

わたしの心も体も煙で満たされる。

Delight.

わたしは空気を汚しません。

あたしは首を持ち上げて自分の身体を見る。
全身が深緑色の鱗で覆われていた。
やだ、なにこれ、気持ち悪い。
光沢のある鱗は照明を反射し、ぬらぬらと妖しく光っている。
これでは人魚どころか半魚人だ。
若い頃から男に褒められ続けてきた自慢の白い肌はどこにもなかった。
いったいあたしの身体になにが起こったの？

芳しい木の香りがする。
あたしはヒノキのまな板の上に仰向けに寝かされていた。
意識ははっきりとしているのだが、金縛りにあった時のように身動きがとれない。
ふと上を見てみると、夫のしかめ面が目に入った。
角刈り頭に捻り鉢巻き、板前の格好をした夫は、腕組みをしてあたしをにらみつめている。
その右手にはなぜだか出刃包丁が握られていた。
あたしの頭にいくつもの疑問符が浮かぶ。
そもそも営業マンのくせに、なんでそんな格好を――

「では、始めます！」

夫が突然、野太い声を上げた。
ちょっと、なに始める気？
逃げようともがくのだが、ぴくりとも身体は動かない。
夫は出刃包丁の柄を手の中ですく回し、刃の背であたしのおなかをこすり始めた。
肌を埋め尽くすようにびっしりと張り付いていた鱗が、ばりばりと音を立てて剥がされてゆく

。弾け飛んだ鱗が金色の紙吹雪のようにきらめき、あたしの周りを舞っている。

ばりばり。ああ、ばりばり。ああ、なんだか、これ、気持ちいいかも……。
あたしはわが夫の鮮やかな包丁さばきに見とれ、いつしか身をまかせていた。
やがて深緑色の鱗はすっかり剥がされ、すべすべの白い肌が姿をあらわした。
おおおお。と観衆から感嘆の声が漏れる。
観衆がいたんだと、今頃になって気づく。

ああ、それにしてもすっきりした。
さあ、あなた、もういいからはやくここから下ろしてよ。
恥ずかしいじゃないの。なんてったって、はだかなんだし。
だが声は出なかった。

あたしはその辺の池の鯉のように口をぱくぱくさせる。
ねえ、あなた、はやく下ろして。
あたしは夫に目で訴えかける。

「では、今から三枚に下ろします！」

は？
ちょっとおおおおおおおおお！
なに言ってるのよこのおたんこなす！
さっさとここから下ろしなさいよ！

「三枚に、三枚に……」

夫は戸惑いの表情を浮かべている。

「このサカナの場合、三枚に下ろすには、下ろすには……」

夫の目にきらりと光が宿る。なにかを思い出したようだ。

「真ん中からいきます！」

ええっ！？

夫はあたしの足首をしかとつかんで持ち上げた。

それじゃ大事なところが丸見えじゃないの！ バカ！ ハゲ！

夫は目を細め、出刃包丁の刃をあたしのおそこにぴたりと当てる。

そこだめええええええええええ！

あたしは自由な方の足で夫の顔を蹴り飛ばした。

やった！ 動いた！

「痛え！」

はっ。あたしは目を開く。

パジャマ姿の夫が頬を押さえてあたしをにらみつけている。

片手にはあたしの足首が握られていた。

「ちょっと、あなたなにしてるの？」

「なにしてるのじゃねーよ。おまえが風呂上がりにうたたねしちゃうからだな、疲れてんだな
と思って、足とか揉んでやってたの」

「うん」

「で、ここだここ」

夫はあたしのかかとを指差す。

「カサついて鱗みたいになってるだろ？ だからスキンクリーム塗ってやろうとしたら—— この仕打ちだ」

夫はほれ、と赤く腫れた頬を突き出す。

「ごめんなさい。あたし夢見でて……」

素っ裸のまま観衆の前で大開脚させられたことを思い出す。

すると、手が勝手に動いていた。

ぱしん、とリビングに高い音が響く。

「痛え！ なにすんだよ！」

夫は目をまん丸に見開いている。

「ヘンタイ」

あたしはおなかに掛けられていたタオルケットを頭から被った。

夏休み

うちの小学校もついに夏休みに突入した。

ぼくはクラスメイトのひろゆきと計画を立て、彼のおじいちゃんの住む田舎へ、二人だけで遊びに行くことにした。

電車を数回、さらにバスを乗り継ぎ、ぼくらは〇〇県の外れまでやってきた。

バス停で降りても周りは田んぼだらけ。遠くを見渡しても山ぐらいしか見当たらない。

都会と違い、とにかく高い建物が無いのだ。

飛びまわるトンボやカナブンなどを冷やかしながら細い農道を歩いて行くと、やがて古い民家が見えてきた。

「あれだよあれ」ひろゆきが言う。

小さな納屋の前でトラクターをいじっているお年寄りの姿が目に入った。

「じいちゃん」

「おう、ひろちゃんか、よく来たな」

おじいさんはそう言うと、麦わら帽子のあごひもをゆるめた。

「こんにちは、お世話になります」

ぼくは帽子を脱いで挨拶をした。

「長旅で疲れたやろう、まああがりなさい」

おじいさんは作業を止め、民家の方へ歩いていった。

キンキンに冷えた麦茶を飲みながらぼくらはおじいさんと一緒にお菓子を食べた。

小学校の話やひろゆきの家族の話などをしているうちに、ぼくはだんだんおしっこに行きたくなってきた。

「ねえトイレある？」ぼくはとなりのひろゆきに小声で訊く。

「あるにきまつてるだろ」ひろゆきは大きな声で言う。

「ただし、外だけだな」

「外？」

「汲み取り式の便所だからの。母屋から離れてるんじゃよ」

おじいさんが説明する。「中に落ちないように気をつけてな」

「気をつけろよ。落ちたら死ぬぞ」

「もうっ、落ちないよ！」

ぼくは場所を教わり、一人でトイレに向かった。

母屋を出るとセミの鳴き声が夕立のように降り注いでくる。

十メートルほど離れたところに細長い木製の小屋があった。

これかあ。

なんの変哲もない小屋だった。

ぼくは色あせたノブを握り、がたつく扉を開ける。

クモの巣の張った正面の窓から西日が差し込んでいる。

にもかかわらず、小屋の中は少し肌寒く感じられた。

たしかに不気味な雰囲気ではある。

まずあれほどうるさかったセミの鳴き声が聞こえない。

この場所だけが外界から遮断されているような気分になってくる。

ぼくはなるべく便器の中を見ないように、そしておしっこをこぼさないように、気をつけて用を足した。

「あー怖かったー」母屋に戻ったぼくの第一声がそれだった。

「まだ昼だからいいよ。夜は半端ないぜ」

「夜は足元も暗いしのお」おじいさんがそう言って笑う。

「このあたりの村も昔は貧乏やったからな、食わせられない子供や、出来の悪い子供は、みな汲み取り便所に捨ててしまう、そんな風習があったんじゃ。だから、お前たちも、勉強もせんとあんまり遊んでばかりやと——」

「やめてよおじいちゃん！ ちゃんと宿題も持ってきたんだから！」

「そうかそうか、ならいいわい」

わっはっはとおじいさんは高らかに笑う。

焼けた肌に刻まれた細い目は笑いジワに埋もれ、無くなってしまったかのように見えた。

おじいさんの手作りの夕食を食べて、少しテレビを見たあと、ぼくらは寢床についた。

遊びすぎて疲れたからか、ひろゆきはあっという間に寝てしまった。

負けじと目をつむって寝よう寝ようと集中していると、おなかが急に痛くなってきた。

寝る前に食べたアイスクリームがまずかったのかもしれない。

がまんして寝ようと思ったのだが、だんだん痛みがひどくなってきた。

「ねえ、ひろゆき、ひろゆき」

いくら背中を揺らしても、ひろゆきは起きなかった。

しょうがないのでひとりでトイレに行くことにした。ぼくはおなかを押さえてきしむ廊下をそろそろ進む。

おじいさんも寝てしまったのか、家の中の明かりはすべて消えてしまっていた。

とにかく早くすませてしまおうと思い、ぼくは急いで外に出た。

頼りない虫の鳴き声 that 下草の間から聞こえてくる。

月は雲に隠れてしまったようで足元はあまり見えなかった。

小屋にたどり着き、扉を開ける。手探りでスイッチを押すと裸電球がぱちりと点いた。
とたんにばさばさと大きな蛾が飛びまわる。ぼくはびくびくしながらズボンを膝まで下ろした

。なるべく下を見ないようにする。さあ出すぞ。と思ったその時、下から声がした。

「うう」

出かけていたものも止まってしまった。

「ううううう」

ふたたび聞こえる。

おそろおそろ股の間をのぞき見た。

「ひっ」ぼくは息をのんだ。

青白い顔がぼうっと闇に浮かび上がる。

おそろしく長い髪の毛が顔にべっとりと張り付いている。

目があるはずのところに目がない。髪の毛で隠れているわけでもない。

つぶれひしゃげた鼻の下には真っ赤な裂け目が口を開いていた。

そいつはか細い両うでを上げ、ぼくが用を足すのを待ち構えているようだ。

いや、それとも、ぼくが落ちるのを――

「ううううう、ううううう」

えたいの知れない生き物は髪をふり乱し、ぼくを招くようにうでをゆらゆらと揺らしている。

もうとっくに便意など忘れてしまっていた。

ぼくはパジャマのズボンを引っ張り上げ、小屋を飛び出した。

くつが脱げるのもかまわず走った。

部屋に駆け込むと頭から布団にダイブした。

「おい、ひろゆき！ ひろゆき！」

「ううん」

「おきろ、おきてよ！」

「なんなんだよ」

ひろゆきはだるそうに半身を起こし、目をこすりながら振り返った。

「どうした？ なにか見たのか？」

ひろゆきは細い腕を顔から下ろした。

あるはずのところに目がなかった。

花火

「おまえなんで浴衣着てるねん」「花火行く」「あかん、熱あるんやろ」「来年亮くとまたいっしょに見られるかどうかわからへんもん」「なんでやねん」「さいきん亮くんつめたいやろ。そろそろうちと別れよとか思てるんやろ」「あほ、思てないよ」「うちわかるねん。だから、最後までいいから、いっしょに花火いこ」

兄じゃ

数カ月ぶりに実家に帰ってきた。

「お母さんただいま」

「おかえり」

久々に見る母の顔はしぼんだ風船のようにやつれ、疲弊し切っていた。

「どうしたのお母さん、顔色悪いわよ」

「理恵、帰ってきて早々で悪いんだけど、お兄ちゃんの部屋覗いてみて」

「なによそれ、あいつ相変わらず引きこもってるの？」

「ええ……、とにかく、いいからお願い」

兄は数年前に仕事を減になって以来、自分の部屋に引きこもりがちになっていた。

最近では家に人がいる時には部屋の外に出ることがまったくなくなり、両親ですら彼がどのように日々を過ごしているのかまるで把握できなくなっていた。

あたしは手荷物を玄関に置き、二階へ続く急な階段に足を踏み出した。後ろから重い足取りで母がついてくる。

階段の途中で気づいた。廊下の奥から異臭が漂ってくる。アンモニアのように鼻を刺す匂い。

あたしはかつての自分の部屋の横を通り過ぎ、兄の部屋の前で立ち止まった。

耳を澄ませると中からずずずと何かを引きずるような音が聞こえてくる。

後ろを振り返る。母の震える手はあたしのブラウスの裾を掴んでいる。

自分の手のひらの湿り気を感じながらそっとノブを握る。鍵はかかっている。

さきほどの奇妙な音はすでに止み、廊下は静寂に包まれている。

あたしは覚悟を決め、一気にドアを引いた。

匂いが急激にきつくなる。あたしは服の袖で鼻を押さえ、薄暗い室内を見回した。

ペットボトルやお菓子の袋が床に散乱している。兄の姿は見当たらない。

机を占拠しているパソコンの画面上では時代遅れのスクリーンセーバーがくねくねと踊っていた。

部屋の隅を見てぎょっとする。

ベッドの陰でツチノコのような形をした大蛇がとぐろを巻いていた。

伸ばせば体長5、6メートルは優にあるだろう。

「お母さん、なによあれ」

「お兄ちゃん、あんな姿になっちゃって」

母はあたしの腰を両手で掴み、わなわたと震えていた。

あたしは武器になりそうなものを探し、机に立てかけられていた金属バットを手にとった。
ツチノコはあたしの殺気を感じたのか、ベッドの下に無理やり潜り込んでしまった。

混沌としている兄の机まわりを調べてみると、Amazonの納品書が見つかった。
あたしは目の前のカーテンを開け放ち、それを光にかざした。

【数量】 1

【種類】 爬虫類

【商品名】 アナコンダ